

長野県植物研究会 2011 年度大会及び 198 回例会の報告

大塚 孝一 *

2011 年度大会及び例会が、6 月 11 日～12 日の二日間で下記の日程、内容で行われました。大会参加者は 42 名、例会参加者は 26 名でした。

担当幹事：大塚孝一。

1 日時 平成 23 年 6 月 11 日(土)午後～12 日(日)

2 場所 6 月 11 日(土)：

伊那市 伊那図書館視聴覚室

6 月 12 日(日)：

伊那市 小黒川溪谷

平成 23 年 6 月 11 日(土)

平成 23 年度大会

12:30 ～ 受付

12:30 ～ 13:20 植物同定会

13:20 ～ 13:50 総会

14:00 ～ 14:40 特別講演

浅野一男氏(町田市)：下伊那の植物相

14:50 ～ 16:50 一般講演(1 題 15 分)

1 上野勝典・上野由貴枝(松本市)：

長野県のホテイランとヒメホテイラン

2 蛭間 啓(飯田美博)・佐伯いく代(横浜国大)：

日本海型ブナ林構成種の葉緑体 DNA ハプロタイプの地理的変異

3 星山耕一(星山景観)：

長野県の希少植物—図鑑出版—

休憩

4 渡邊祐喜・島野光司(信大理)：

植生管理がチョウに与える影響

5 渡辺太一(信大農院)・大窪久美子・大石善隆(信大農)：

上伊那地方の水田地域における植物相の構造と多様性

6 大塚孝一・浜田崇(環保研)：

日本産ザゼンソウ属植物の発熱現象

7 中山 洸(佐久市)：

信州の植物 スライド解説(4)

宿泊・懇親会

伊那市ますみが丘 6975-24 (〒396-0021)

ますみ荘 電話：0265-78-1414

平成 23 年 6 月 12 日(日)

第 198 回例会 8:30 ～ 14:00 頃まで

場所：伊那市 小黒川溪谷林道沿い

大会開始前の植物標本同定会では、主として中山会長が同定者となり、また、参加者が得意な分類群について受け持ち持ち寄られた標本の検討がなされました。中山会長のあいさつの後、総会にはいり、事務局の佐藤庶務幹事、島野会計幹事から事業報告、会計報告がなされました(写真 1・2)。

特別講演では、浅野一男先生が長年調査されてきた下伊那の植物について「下伊那の植物相」と題して発表されました(写真 3)。一般講演では 6 題の発表と、中山会長のスライド上映がありました。今

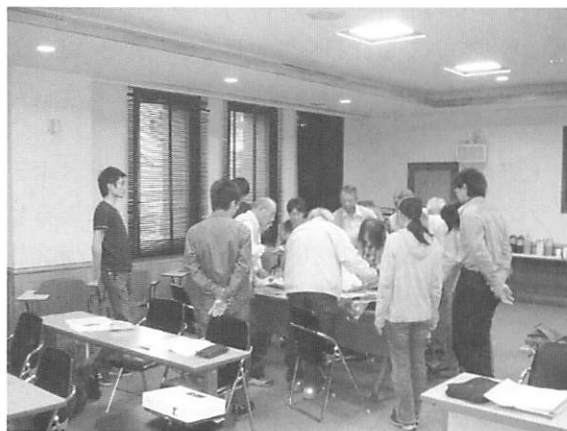


写真 1 植物同定会



写真 2 大会の様子

* 大塚 孝一 〒380-0952 長野市宮沖 199-1

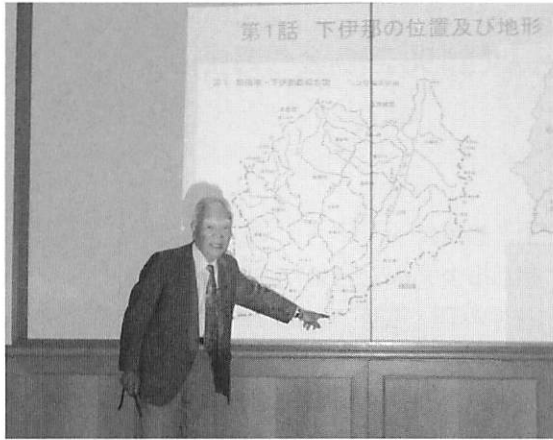


写真3 特別講演 浅野一男先生

回発表要旨を配布することができました。概要は以下のようですが、要旨の入手を希望される方は、大塚までご連絡ください（浅野先生と中山先生は項目のみ）。

浅野先生は、調査した下伊那の位置や地形の説明の後、下伊那地方の植物分布の特徴について、日本海要素の植物、ササ属の分布、襲速紀要素の植物、西日本型の分布する植物など、詳しい分布状況を説明されました。また、常緑広葉樹林ウラジロガシ-サカキ群集、高山植物の推定分布南限、イカリソウとキバナイカリソウの分布、ササユリとヤマユリの分布、シロバナネコノメソウ列の植物などについても詳しく解説していただきました。先生は、現在下伊那の植物相の総まとめをされているので、出版が待ち望まれます。

上野勝典氏は、ホテイランの変種のヒメホテイランが、南アルプスの一部（富士見町）にあると報告されている中で、2008年にヒメホテイランと思われるものを旧長谷村で発見していること、ホテイランはヒメホテイランよりも大きく、唇弁の距が基部から突き出ている点でヒメホテイランと区別される変種であるが、長野県内で観察した両者はそれ以外では極めて似ており、距の長さにも幅があるように思われたことから、両者のサイズについて測定し、距の長さの分布について調べ報告されましたが、区別するのはなかなか難しいとされました。

蛭間啓氏は、ブナ林構成種の遺伝的多様性の地理的な変異について発表しました。ブナ林には太平洋側と日本海側との間でその種構成に大きな違いが見られ、それぞれ太平洋型ブナ林、日本海型ブナ林として認識されていること。しかし面白いところは、ブナ林以外の植生をまとめて考えると、構成種のほとんどは太平洋側、日本海側のどちらにも分布するもので、太平洋型、日本海型ブナ林の種類構成の違

いを表している種の多くは、もう一方の地域にも存在しているが、ブナ林には生育していないことになるということである。現在の日本海型ブナ林構成種の分布変遷はどのようなものだったのだろうか。ブナのDNAに関する研究成果では、過去の分布変遷を反映すると考えられる葉緑体DNAが、北陸のブナのもと東北地方日本海側のものとが類似しているという結果がえられ、北陸が分布拡大起源地の1つであると考察されている。そこでアクシバ、タムシバ、ツルアリドオシ、ハナヒリノキ、ショウジョウバカマ、イワウチワ6種についても、各地で葉を採取し、葉緑体DNAの地域変化を調べた。その結果、まだ研究途中であるが紹介すると、ショウジョウバカマ、タムシバは、南信あるいは北陸から東北へ拡大した可能性が考えられた。すなわち、南信、北陸のものと東北のものが同じタイプで、滋賀、鳥取のものは違うタイプであった。ハナヒリノキは、南信と東北で全くハプロタイプが違うので、南信から北上したとはいいがたい。アクシバ、イワウチワは広域にわたって様々なタイプがみられ、氷期の避難場所が各地に点在していた可能性がある。ツルアリドオシは今のところあまり変異がみられていない。という、仮説も含めおもしろい内容の発表でした。

星山耕一氏からは、4月に出版された著書の「信州の希少植物と森林づくりー希少植物図鑑 231種ー」の概要について発表しました。本書は、植物の写真と植物の特徴、生育環境、分布等を解説として記載した「植物図鑑」と、森林整備の実施に際し留意すべき事項やその対策について記載した「希少植物と森林づくり」から構成されていること。巻末には、本書に掲載はしなかった種も含め、「長野県版レッドデータブック 2002」および「環境省レッドリスト 2007」に掲載されている124科831種の維管束植物リストが掲載されていることなどについて、説明されました。本書に掲載した植物は、主に森林整備（森林づくり）が実施される森林内に生育している、あるいは森林の構成種となっているもの231種を選らんだとのこと。会場では出版直後ということもあり、多くの方が購入されていました。

渡辺祐喜・島野光司氏は、チョウには森林性、草原性様々なタイプのものがあり、雑木林や草地はそうしたチョウの生育地として機能してきたが、雑木林や人工草地が管理をされず、植生が変化することでチョウの生育地としての好適性が減少することが考えられることから、草地並びに異なる管理頻度の雑木林で、どのようなチョウがどれくらい生息して

いるかを調査し、その要因を林分構造と光環境、種組成から考えることを目的に研究した内容を報告しました。明るい地点でチョウの種類数並びに個体数共に増加すること、また開花している植物の多い地点でチョウの種類数並びに個体数が多いこと。最も明るくチョウが多かったのは草地だが、雑木林では管理が行われ、低木の少ないところで明るく、チョウが多かったこと。しかし、草地には出現しないチョウなどもいるため、立地を一樣に明るく管理するのではなく、多様な植生を維持することが必要であることなどが報告されました。

渡辺太一氏は、近年、水田地域は絶滅危惧種を含む多様な植物種の生育地として高く評価されるようになり、多様性保全に向けた研究も進みつつあるが、水田地域における植物多様性を地域スケールで捉えた研究は少なく、その成立要因を解明し、景観レベルで保全管理手法を検討することが求められているため、立地条件の異なる水田地域において植物相の構造を把握し、これらと土地利用や管理形態との関係性から地域スケールでの植物種の多様性について解明することを目的とした研究について、発表しました。項目としては、①地域の植物相の多様性、②各地域植物相の構成、③各景観要素の特性、④各地域の土地利用と植物相の多様性についてでした。

大塚孝一氏らからは、ナベクラザゼンソウが発熱する植物であることを報告しました。植物の発熱現象はおよそ 200 年以上まえ、フランスの博物学者ラマルクによりヨーロッパ・アルム・リリー（サ

トイモ科）で報告され、その後、ヒトデカズラ、ザゼンソウ（広義）、ソテツ、ハスなど多くの植物で発熱する能力があることが知られていて、ザゼンソウ（広義）は肉穂花序が特異的に発熱し、外気温が氷点下にながっても花序の温度は 20℃内外を保てることが知られていること、国内外で報告された発熱植物の中で、寒冷な環境下で発熱しその体温を調節できる恒温性を有する植物は、ザゼンソウ以外には知られていないこと、日本産ザゼンソウ属植物について調べた結果、ナベクラザゼンソウは寒冷地で発熱する植物としては世界で 2 例目であること、ヒメザゼンソウは発熱しないことなどが報告されました。

中山冽会長からは、「信州の植物スライド解説 4」として、恒例になった植物解説をしていただきました。解説した植物は次の 49 種でした。いつもありがとうございます。ユキワリソウ、センブリ、コイワザクラ、アカヤシオ、ハナヒョウタンボク、ツメレンゲ、ダンバイヅル、ヒメハナワラビ、ヒンジモ、ウラシマソウ、ヤマトキソウ、オニク、ツルカメバソウ、ハコネコメツツジ、チチブミネバリ、チチブシロカネソウ、イヌハギ、ベニバナヤマシャクヤク、ヤマシャクヤク、タカネマコナ、エゾハンノキ、マルバマンネングサ、ツチアケビ、ミズオオバコ、ナンブワチガイソウ、リュウノウイワインチン、ヤマタバコ、カリガネソウ、アギナシ、ホソバウキミクリ、ヤマナシウマノミツバ、ノ



写真 4 集合写真



写真5 観察会の様子 中山会長

写真6 観察会の様子
小林先生からアカネの托葉は...

ジトラノオ、ノダイオウ、オカウツボ、ツルカコソウ、ウチョウラン、イワカラマツ、ヤナギスブタ、アカテンオトギリ、タルマイスゲ、シモツケヌリトラノオ、イワムラサキ、オニノヤガラ、デンジソウ、オオイワインテン、カイジンドウ、カリヤスモドキ、タコノアシ、ヤマブキソウ。

(大会参加者)中山洸、佐藤利幸、島野光司、小口好久、馬場多久男、藤田淳一、蛭間啓、坂口峻弥、川上美保子、笠原光枝、吉沢敏江、多田景子、佐藤桃子、佐々木あや子、星山耕一、平田大輔、清水理恵、戸谷やよい、早坂祥彦、大塚孝一(以上宿泊・懇親)、北沢あさ子、上野勝典、上野由貴枝、太田秀子、太

写真7 懇親会二次会時の馬場多久男先生
(左から3人目)の講話

田守泰、石井佳代子、新谷大貴、和田房臣、伊藤武、荒川諒、西澤太貴、渡辺太一、桶川直哉、松下遼太、橙川元晴、吉田裕、松井一晃、大窪久美子、大谷瑠里、堀拓人、榊原有里子、前田沙織(42名)。

翌日の例会は8時30分に小黒川キャンプ場前に集合し、当日参加者に加え集合写真を撮影後(写真4)、林道沿いを植物観察しながら進みました。植物リスト作成と例会の詳細報告を藤田淳一氏にお願いしました。中山会長や地元の小林正明先生から植物の説明や類似種の区別など詳しく聞きながらゆっくり進みました(写真5・6)。道は林道で広くじっくり植物観察ができ、目的の信大の桂小場ステーションの手前で昼としました。今回400種近い植物が観察できました。当日観察できた植物のリスト等、藤田さんに別立てで詳細な報告にまとめてもらいました(例会報告参照)。

(第198回例会参加者)中山洸、島野光司、小口好久、馬場多久男、藤田淳一、蛭間啓、川上美保子、笠原光枝、吉沢敏江、多田景子、佐藤桃子、佐々木あや子、星山耕一、平田大輔、清水理恵、戸谷やよい、早坂祥彦、大塚孝一、小林正明、渡辺太一、宮島陽子、北沢あさ子、太田秀子、太田守泰、篠原喜運、松井和美(26名)